



リレー日記

【神奈川県】今野千保^{こんのちほ} 67歳

97歳まで、毎日、料理やレース編みを楽しんでいた母。突然、ぐったりして、緊急入院。心不全が悪化していた。

唯一の同居人である、私。ほぼ毎週、山形への出張が入る。早朝、病院に寄り、後ろ髪を引かれながら出発。3日目の夜、東京に戻り病院に直行。不在中の容態を知りたい。心配で、不安で、夜勤の看護師さんを質問攻め。勤務交代したばかりで、情報は限られてしまう。仕事を辞めようかと、思い悩んだ。

しばらくして、20代の若い看護師さんから、救いの提案。「毎日、様子をメモしましょうか？ 2、3行くくらいしか書けませんけど」。あ

りがたくて、涙が出た。さっそく、昼夜勤ナースたちによる、リレー日記が始まる。病院に到着するやいなや、チェストの引き出しを開けた。小さなメモ用紙。難聴の母との会話用に、持参したものだ。丁寧な丸っこい文字が、目に飛び込んでくる。

「昨夜はお菓を飲めませんでした。オムツ交換時には、腰上げを協力してくれませす」(V)

「今日はお熱が出ましたが、昼はヨーグルト2口、高カロリー飲料1本、飲みました。猫の写真集を見て、お話ししました」(S)

私も、毎回、お礼を書いた。心が救済されていく。

母は、戦時中、従軍看護婦だっ

た。「あら、大先輩ね」と言われ、はにかんでいたのは、つい先日。血流が悪く、足の指が1本、壊死。切断手術後、目を閉じている時間が増えた。

ある日、Kさんが、病室にいた。「夜勤明け。帰宅前にお顔が見たくて。いつも笑顔に、パワーをいただいています」。眠っている母に頬を寄せながら、言う。

21人もの天使たちが、約2カ月間綴った、リレー日記。2年半たった今でも、温かい気持ちだが、沁みる「大先輩」も、最期に、心からの感謝を、伝えたかったに違いない。